



3月11日15時53分、仙台空港へ津波の第一波が来襲する直前に、施設の144人が無事空港の2階へ避難した。

宮城県内高齢者入所施設の被災47施設

被災施設の内訳 (全壊32・半壊7・浸水8)	
宮城県内の高齢者入所者とその職員の死亡・行方不明者389人	
特別養護老人ホーム	141人
養護老人ホーム	64人
老人保健施設	59人
ケアハウス	22人
グループホーム	37人
職員	66人

大震災当日の施設利用者は96人だった。認知症が進むなど介護の必要度が高い人などほとんどが車いす。さらに在宅サービスの利用者も施設を利用して、職員48人を含むと計144人だった。

14時46分、突然震度6弱の激震に襲われた。建物内の家具や備品は散乱、停電

津波が来襲するまでに1時間しかない判断する。津波が来襲するまでに1時間しかない判断する。津波が来襲するまでに1時間しかない判断する。

経験がいかされた 迅速な避難行動

この日、基調講演で登壇されたのは、宮城県岩沼市の特別養護老人ホーム「赤井江マリノホーム」園長の小助川進さん。この地域は、仙台空港があり、地理、地形は高知龍馬空港から岸本辺りまでの海岸地域と似ている。同ホームは、海岸から200mの距離に立地し、津波が発生すればきわめて危険



小助川 進園長

に。揺れが収まると職員は自己判断でボイラーなどの火気を停止し、入所している人をホールに集め、玄関先に毛布などを用意。情報を入手するためラジオを探したが見当たらず、カーラジオで状況を確認した。ラジオは、10m以上の津波が仙台港に15時40分に来襲すると告げた。

臆病だったから 危機意識を持てた

小助川さんは、「ある報道機関には奇跡の脱出といわれるが、実際は奇跡ではなかった。海が近いこともあってある意味臆病だったからすぐに逃げたといえる。危機意識が強く、判断も速かった。重度の高齢者がいたので素早い判断で逃げるしかなかった」と振り返る。また、「災害マニュアルはあくまで基本。想定外の対応をどうするのか。津波に対しては速く逃げる手立てを講じる。みんなが危機意識を持って訓練を継続すること。確かな情報を得ること。早い段階で行動を移すこと。職員のチームワーク。物を取りに帰らない。長く避難することを考え、備蓄食料の再検討が必要」などを訴えた。

現在、同ホームの入所者は2カ所に分散。長引く避難生活で栄養状態も良くなり、職員が世話をしているが、ストレスも限界だという。同ホームの再建は、地域と一緒に高台へ集団移転するよう話し合いが行われている。



避難した仙台 空港は孤島になった

赤井江マリノホームから1.5km離れた仙台空港。津波は地震発生から約1時間10分で襲来した

空港

倒壊した赤井江マリノホーム

海岸からわずか200m先に立地する赤井江マリノホーム(丸囲み)

key-note address
基調講演

2.11 東日本大震災で全壊した宮城県岩沼市の特別養護老人ホーム「赤井江マリノホーム」の小助川進園長を迎えたシンポジウム「南海地震!!頼りになるのは地域の絆」が2月11日、のいちふれあいセンターで開かれました。これは、南国・香南・香美地域保健医療福祉推進会議などの主催。小助川進園長の基調講演、県薬剤師会香長土支部長や赤岡中学校校長らによるパネルディスカッション、赤岡中学校の防災活動の発表などが行われました。

144人の命を救ったのは「奇跡」ではなかった。過去の経験をいかし判断する。この意識の徹底が「希望」につながった。



※福祉関係者や地元住民など約170人が参加

パネルディスカッション
テーマは「つながり」



基調講演の後に行われたパネルディスカッションでは、「つながり」をテーマに4人のパネラーの活動報告をヒントに、今私たちにできることについて話し合った。

基調講演の後に行われたパネルディスカッションでは、「つながり」をテーマに4人のパネラーの活動報告をヒントに、今私たちにできることについて話し合った。

◆赤岡中学校の小松一雄校長は、全校生徒で作成した赤岡・吉川地区の津波ハザードマップを使った地域とのつながりについて話された。次ページで詳しく紹介した。

◆南国市食生活改善推進協議会の門脇由紀子会長からは、女性の知恵をフルにいかし、水や調理道具がない非常時のための工夫などが紹介された。また、この活動を地域や学校に広げることについて話された。

◆薬剤師会香長土支部の西田光宏支部長からは、被災地で薬の種類が分からなく苦勞した経験から、「お薬手帳」の普及を訴えた。また、医師と薬剤師、市町村がうまく手を結びつなげることで、薬の問題をうまく解決していくための方法について話された。

◆香美市社会福祉協議会の徳弘博国さんは、災害時のボランティア活動などについて詳しく説明。困っている人と役に立ちたいと思っている人をうまくつなぐことの重要性と社会福祉協議会の役割について話された。

講師の小助川進園長は、「被災後しばらくは、ボランティアをお願いするための情報もなかった。いろいろな情報が共有できれば」と話され、アドバイザーの高知県中央東福祉保健所の田上豊資所長は、「それぞれの団体が広がりをもち、どんな繋がりをもつて、さらにみんなで力を合わせて住民と一緒に合同訓練ができれば素晴らしい」と各団体の今後のさらなるつながりと活躍に期待を寄せた。

問い合わせ
防災対策課
57-8501

※4月以降も防災に関する情報が提供されます。次号、首様にお知らせいたします。

今こそ、備えを強化する時 (完)